

# 保健室利用生徒における心理・適応6尺度の妥当性

## The Validity of the Six-Scales Psychological and Adaptive Test with Students Who Often Use School Infirmaries

(2018年3月31日受理)

清重 友輝\*\* 西本 素江\* 福森 護

Yuki Kiyoshige Motoe Nishimoto Mamoru Fukumori

Key words : 保健室利用生徒, 生徒理解, 心理傾向, プロフィール

### 抄 録

西本ら(2016)および清重ら(2017)は、教育現場における生徒理解の補助を目的として、「生徒理解を深める心理・適応6尺度」を構成し、その妥当性の検討を行っている。本研究では、保健室の年間利用回数の多い生徒25名を対象として、6尺度から得られたデータをプロフィールに図示し、そこに示された生徒の心理状態と具体的な生徒像との関係を見ることで、6尺度の妥当性を検討した。その結果、6尺度を構成する上で基点とした「自己追求と他者志向のバランス」、「適応状況」、「ストレス」の3点について、生徒の内面をよく反映した結果を得ることができた。これは、6尺度が生徒の基本的性向や問題点の把握などを行う上で有用であり、また心理検査として高い妥当性を有することを示すものと考えられる。

## I. 問題と目的

### 1. 問題の所在

近年、保健室を利用する生徒の状況は多様化している。保健室を来室する生徒の中には、病気や怪我といった身体面の問題だけでなく、心理面の健康に問題を抱えているケースも少なくない。そして、そうした心理面の不調は、生徒ごとに様々な形をとって現れる。

最もわかりやすいのは、強い不安感や焦燥、落ち着きのなさ、情緒易変性といったような、精神的不安定という形で現れるものである。

学習の進捗状況や進学問題、クラブでの活動、教師との関係、友人関係、家庭事情など、生徒の心が乱れる要因は多岐に渡る。自分が抱えている問題をはっきりと自覚しており、その相談のために保健室を訪れる生徒もいれば、自分が抱える問題を隠そうとしたり、自分の状態がよくわかっていない者もいる。

表面的には、頭痛や腹痛、下痢、吐き気などを訴えていても、内面ではいじめなどの悩みを抱えているといったケースもあるし、苦手な授業を避けたいときや、特定の教師や級友と顔を合わせたくないときなどに、不安や焦燥を解消する手段として、体調不良を理由に保健室に逃げ込むといったケースもあるであろう。

また、問題を抱えているという明確な自覚がなくても、心理面の不調が倦怠感や気分不良、不眠といった身体的症状として現れることもある。こうしたケースでは、身体的なケアだけでは症状が改善しなかったり、または改善してもすぐに再発するといったことが起こったりする。

さらに、体調の悪さの背景に生活習慣の乱れがあるケースも考えられる。食事や睡眠のリズムが不安定になれば、どうしても体調を崩しやすくなる。こうした場合、生活習慣が乱れる原因として、家庭環境に問題があったり、何らかの悩みがあることで精神的に不安定な状態に

\*徳島市城西中学校 \*\*ひびきのさと人間精神学研究所

あり、それが不規則な生活につながっているといったこともある。

これ以外にも、養護教諭にかまってもらいたいという理由から、保健室に来室するといったケースもある。これは、誰かに甘えたい、自分の話を聞いて欲しいといったことが動機となっており、この背景には家庭での愛情不足があると見ることができる。

このように、生徒がもつ心理面の不調は実に多様な形で現れることになるが、いずれにしても、心理面の健康に問題を抱えている生徒は、病気や怪我といった身体面の問題で保健室を利用する生徒と比較して、より注意が必要な状態にあるということができる。

心理的な健康は、薬を処方したり傷口を塞ぐことで直ちに改善されるようなものではなく、問題の解消に長い時間がかかることが多い。また、時間が経てば自然と快方に向かうといった性質のものでもない。それだけに、心理面の健康に問題を抱える生徒に対しては、状態の推移を用心深く見守り、時には積極的な働きかけを行っていく必要がある。

もし、心理的な問題を抱えていることに気づかずに放置してしまうと、状態は悪化し続けることになる。そうなれば、問題の解消はいつそう困難なものとなってしまいうし、より深刻な事態を招く可能性も出てくる。そうした事態に陥らないためにも、生徒の内面がどういった状態にあるかには、最大限の注意を配る必要がある。

ここで重要となるのが、どのようにして生徒の内面への理解を進めるのかという点である。

心理的な問題の有無に関しては、保健室の利用回数の多さを一つの目安とすることができる。心理面の問題解消が長引くということは、そうした問題を抱える生徒の場合、保健室を利用する回数は自然と増加する傾向にあると考えられるからである。

逆に言えば、保健室を頻繁に利用する生徒は、何らかの心理的な問題を抱えている可能性が高いと見ることができる。したがって、こうした生徒と接する際には、表面的な症状を見るだけでなく、同時に内面への理解を進め、問題の本質がどこにあるかを見極めていくことが重要になる。

それでは、具体的にどのようにして生徒の内面への理解を進めるのかという点であるが、多くの場合、生徒理

解の手段とされるのは、実際に生徒と接した上で得られた所見であったり、教師間で共有される情報であったりする。これらは生徒との直接的な関わりから得られるものだけに、有益であることは間違いない。

ただし、この方法には問題点もある。観察や交流から得られる情報とは、教師の主観に基づくものであるために、そこにはどうしても教師自身の力量や心理的性質の影響が出やすくなってしまふ。

経験豊富なベテランと経験の浅い新人とでは、得られる情報量に大きな違いが出るであろうし、教師の性格や気性の違いが生徒への評価に差を生むこともある。実際に、教師間で生徒の評価が分かれることは珍しいことではない。主観に基づく評価に頼る場合には、どうしても情報の確度や精度にバラツキがでることは避けられない。

また、どれだけ経験を積んだ教師でも、思い違いや誤解をすることはあるし、教師も人である以上、バイアスのかかった見方を完全に避けることはできない。その場合、経験豊富で自分の見立てに自信のある者ほど、自らの間違いを正すことができず、誤った評価に拘泥したりする。こうなれば、生徒の状態を正しく把握することはできなくなるし、誤った対処をとることで生徒に悪影響を与えることもある。

このように、生徒との直接的な関わりから得られる情報は有益ではあるが、それだけに頼って生徒の内面への理解を進めようとするには問題もある。

もとより、評価や判断といったものは、単一の基準で行うよりも、複数の基準を併用するほうが望ましい。物事への理解を進める上では、一面的な見方は避けて多面的な捉え方を行うべきで、この点からも、生徒理解を進める上では、教師の主観的判断を唯一の評価基準にするのではなく、それ以外にも、より客観的な評価基準を用意する必要があると考える。

## 2. 生徒理解を深めるための心理適応6尺度

こうした状況を踏まえ、西本・清重・中塚(2016)および清重・西本・福森(2017)は、生徒理解の補助を目的とした「生徒理解を深める心理・適応6尺度」を構成し、その妥当性の検討を行っている。因子分析の結果から構成された6尺度は、各10項目からなっている。各尺

度についての尺度項目のサンプルと簡単な説明は、次の通りである。

まず、Ⅰ.「内的自己確立」(・状況や他人の意見にあまり流されないほうである、・自分に自信をもっている)は、自分というものを尊重し、自己主張や自己追求を図ることで、独立した一人の存在としての「自己」を確立していこうとする心の方向性を表している。次に、Ⅱ.「ストレス」(・腹が立つことが多い、・何もかも嫌だと思ふ)は、心理的なストレスの大きさを測る尺度である。Ⅲ.「家庭適応」(・家族にとって自分は大切な存在である、・父母はあなたを信頼していると思う)は、家庭の中での適応状況を示している。Ⅳ.「他者・社会定位」(・嬉しいことがあるとつい人に話してしまう、・自分の意見よりも人の意見を尊重するほうである)は、他者との関係性を尊重し、他者を求め、社会的なつながりを欲する心の方向性を表している。Ⅴ.「クラス・仲間適応」(・自分の本音や悩みを話し合える友人がいる、・友だちと一緒にいると楽しい)は、クラスやクラブの中で友人と良好な関係を築くことができているかを測るものである。Ⅵ.「学校・教師適応」(・先生は自分のことをかなりよく理解していると思う、・学校へ登校することが楽しみだ)は、教師との関係性を含めた学校生活を肯定的に捉えているかどうかを測るものである。

これらの尺度値はパーセンタイルに直して円形のプロフィールに図示され、個々の生徒ごとの特徴を把握することができるようになっている。

6尺度を構成する上で基点としたのは、①自己追求と他者志向のバランス、②適応、③ストレスという3つの要素である。①と関連するのがⅠ.「内的自己確立」とⅣ.「他者・社会定位」で、これらは生徒の心が自分と他者のどちらに向いているかや、両者のバランスを見ることで、おおよその心理的性質を測ることを狙いとしている。②と関連するのは、Ⅲ.「家庭適応」、Ⅴ.「クラス・仲間適応」、Ⅵ.「学校・教師適応」で、これらは生徒の主な活動の場における適応状況を測ろうとするものである。③と関連するのは、Ⅱ.「ストレス」で、これは生徒が抱える心理的ストレスの状態を測り、さらに①や②の結果と比較することで、生徒が抱える問題の原因を探る狙いがある。

今回の研究では、保健室の利用回数が多い生徒を対

象として、心理・適応6尺度から得られたデータをプロフィールに図示し、そこに示唆された生徒の心理的状态と具体的な生徒像との関係を見ることで、6尺度の妥当性を検討する。

## Ⅱ. 方 法

### 1. 調査対象

四国のA県の公立中学校三年生216名のうち、保健室利用回数の多い生徒(年間10回以上)25名である。

### 2. 手続き

西本ら(2016)および清重ら(2016)の構成した「生徒理解を深める心理・適応6尺度」を、上記調査対象を含む216名に対し2016年度に配布、実施した。

回答は「大体あてはまる(4点)」、「少しあてはまる(3点)」、「あまりあてはまらない(2点)」、「ほとんどあてはまらない(1点)」の4件法になっている。それぞれの尺度ごとに、最低10点から最高40点まで数量的に表され、得点が低いほど状態が悪く、得点が高いほど状態がよいことを示している。

これらの尺度値をパーセンタイルに変換した後、円形のプロフィールに図示する。

### 3. 分析方法

1) 保健室を多く利用する生徒の全体的な傾向を把握するために、25名のプロフィールの平均値を出し、その特徴を見る。

2) 保健室利用生徒の心理的性質や精神状態をより具体的な形で示すために、プロフィールを大きく4つのタイプに分け、どのタイプに属する生徒が多いかを見ることで、おおよその状態を判断する。

さらに、保健室利用回数に着目し、利用回数の多少が属するタイプとどう関係するかを見る。

タイプ分けは、心理的性質との関連性が高いと考えられるⅠ.「内的自己確立」とⅣ.「他者・社会定位」の数値をもとに行う。タイプ分けの基準は次の通りである。

「タイプ1」は、Ⅰ.「内的自己確立」とⅣ.「他者・社会定位」の数値がともに60以上(バランスのとれた安定タイプ)。

「タイプ2」は、Ⅰ.「内的自己確立」とⅣ.「他者・社会定位」のどちらかの数値が60以上で、両者の差が20以上40以下（自他のどちらかが高い標準タイプ）。

「タイプ3」は、Ⅰ.「内的自己確立」とⅣ.「他者・社会定位」のどちらかが85以上または15以下で、両者の差が50以上（バランスの悪い不安定タイプ）。

「タイプ4」は、Ⅰ.「内的自己確立」とⅣ.「他者・社会定位」の数値がともに59以下（自他両方が育っていない未熟タイプ）。

3) 生徒個々のプロフィールの内容と、養護教諭が行った生徒に対するコメント（今回の調査結果が出る前にまとめられたもの）との整合性を見ることで、プロフィールがどの程度正確に生徒の心理状態を表しているかを検討する。

### Ⅲ. 結果と考察

#### 1. プロフィールの平均値

保健室利用回数の多い生徒25名のプロフィールの平均値は、図1に示す通りである。

プロフィールを見てまずわかることは、各尺度の数値が全体的に低いということである。生徒全員（保健室利用回数の多い生徒を含めた216名）の平均値が50であるのに対し、プロフィールに示された数値は、ⅠからⅥまで順に50, 26, 39, 44, 45, 26と、ほぼすべての尺度でこれを下回っている。

これは、保健室利用回数の多い生徒は、他の生徒と比較して、心理的に不安定な状態にあり、各活動の場における適応状況も悪く、ストレスも高い傾向にあることを示している。

各尺度の数値を見れば、Ⅱ.「ストレス」とⅥ.「学校・教師適応」がともに26と特に低い数値を示していた。これは、より具体的な特徴として、学校生活にうまくなじめず、高いストレスを抱える生徒が、保健室を多く利用する傾向にあることを示していると考えられる。

また、保健室利用回数の多い生徒は、保健室を学校という環境からの逃避先として利用している面があるという見方もできる。

この結果は、保健室を頻繁に利用する生徒が、何かしらの問題を抱えている可能性が高いことをよく示すもの

といえる。

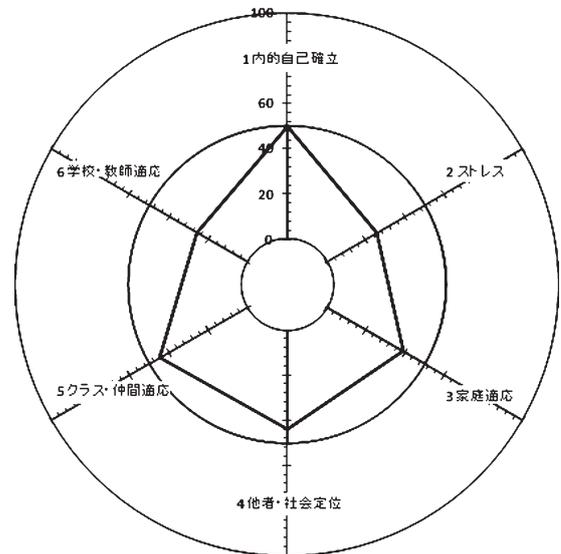


図1 保健室利用回数の多い生徒25名の平均プロフィール

#### 2. タイプ分けに見られる生徒の心理傾向

##### 1) タイプ別の生徒数の内訳

タイプ分けに基づく保健室利用回数の多い生徒の内訳は次の通りである。

タイプ1…2名

タイプ2…5名

タイプ3…8名

タイプ4…10名

分析方法の項で述べたように、タイプ分けはⅠ.「内的自己確立」とⅣ.「他者・社会定位」の数値をもとに行っている。両者の数値がともに高いのがタイプ1で、どちらか一方が高いのがタイプ2、どちらかに極端に偏ったのがタイプ3で、両方の数値がともに低いのがタイプ4である。

Ⅰ.「内的自己確立」の数値は、自己主張や自己追求を図ろうとする傾向の強さを示しており、この数値が高ければそれだけ自分というものを確立することができる。逆に低ければ、自分に自信をもつことができず、消極的で気が弱く、状況に流されやすい状態にあると見ることができる。

Ⅳ.「他者・社会定位」の数値は、他者とのつながり

を求め、社会的な関係を維持し尊重しようとする傾向の強さを示している。この数値が高ければ、それだけ他者に対して開かれた性質をもっていると見ることができる。逆に低ければ、他者のことを信用せず、他者に対する配慮や気遣いといったものが欠如した状態にあると見ることができる。

この2つの尺度は、生徒の心が、自分と他者のどちらに向いているか（あるいは向いていないか）を見ることで、基本的な心理的性質を測るものであるが、これは同時に、生徒が何に対して自らの軸足をおいているか、何を自己定位の対象とし、何を自分の支えとしているかを測るものでもある。

自分というものに定位し、自分の主張や可能性といったものを追求することで自身を安定した状態に保っているのか。それとも、他者や社会に定位し、他者とのつながりや結びつきを強めることで自身を安定した状態に保っているのか。

最も良好な状態とは、どちらに対しても軸足をおき、自他両方を支えとしている状態と考えられる。逆に最も悪いのは、どちらに対しても軸足をおいておらず、何にも定位していない状態と考えることができる。

また、どちらか一方に偏った傾向を見せるケースでは、偏りの度合いと比例して、不安定さの度合いが増していくと考えられる。

内的自己確立と他者・社会定位は、心理的安定や精神的健康を保つ上ではどちらも必要なものであり、どちらか一方だけでよいといった性質のものではない。加えて、一方への大きな偏りは、精神的なバランスを崩すことにもつながる。

内的自己確立だけが極端に高いような場合は、自己中心的でエゴイスティックな性質が前面に出るようになり、周囲との折り合いを著しく欠くようになる。逆に、他者・社会定位だけが極端に高いような場合は、周囲の状況に流されるだけの依存的な性質をもつようになる。どちらの場合にも、多くのトラブルを抱えることが予想され、これを心理的に安定した状態と言うことはできない。

以上のことを踏まえれば、心理的な安定度という点では、I.「内的自己確立」とIV.「他者・社会定位」の数値がともに高いタイプ1が最もよく、次いでどちらか一

方が高いタイプ2も比較的安定していると考えられる。片方に極端に偏ったタイプ3はかなり不安定な状態で、どちらも低いタイプ4は最も悪い状態と考えられる。個別に見れば例外的なケースも出るであろうが、基本的にはタイプ1>タイプ2>タイプ3>タイプ4の順に、心理的安定度が高いと考える。

今回の調査結果では全25名のうち、タイプ1に属する生徒が2名、タイプ2が5名、タイプ3が8名、タイプ4が10名となっており、心理的安定度が高いと考えられるタイプは数が少なく、逆に心理的に不安定な状態にあると考えられるタイプの数が多いことがわかる。これは、不安定なタイプに属する生徒ほど、保健室を利用する機会が多いことを示している。

特に、タイプ3とタイプ4に属する生徒の数が18名と、全体の7割を超えていることは注目すべき点であり、保健室を頻繁に利用する生徒の多くは、精神的なバランスが悪く、自己定位が不十分な傾向が見られるため、何らかの対策が必要であることを示唆していると考えられる。

保健室を利用する生徒が皆、そうした自分の抱える問題を自覚しているとは限らないし、悩みがあってもそれをうち明けることを躊躇するといったこともあるので、教師側からの積極的な支援が必要な状態にあると言える。

## 2) 保健室利用回数とタイプの関連性

保健室利用回数10回ごとに分けた場合の、各タイプの人数は次の通りである。

### 10～19回

タイプ1…2名 タイプ2…3名 タイプ3…0名  
タイプ4…2名

### 20～29回

タイプ1…0名 タイプ2…0名 タイプ3…1名  
タイプ4…1名

### 30～39回

タイプ1…0名 タイプ2…1名 タイプ3…2名  
タイプ4…2名

#### 40回以上

タイプ1…0名 タイプ2…1名 タイプ3…5名

タイプ4…5名

全体的な傾向として、タイプ1とタイプ2に属する生徒は、相対的に保健室の利用回数が少なく、タイプ3とタイプ4に属する生徒は、逆に利用回数が多いことがわかる。

精神的なバランスが悪く、不安定な状態にある生徒は、より深刻な問題を抱えている可能性が高いと言えるし、問題が大きければそれを解消するには、長い時間がかかることが予想される。そうした生徒の場合、保健室を来室する回数も増える傾向にあると考えられる。

もちろん、保健室の利用回数の多さが、そのまま生徒が抱える問題の大きさと直結するわけではないので、これはあくまでも一つの目安ということになる。

それでも、心理的に不安定な状態にあることを示すタイプ3と4に属する生徒が、保健室をより多く利用する傾向が見られることは妥当な結果ということができるし、このことは「生徒理解を深める心理・適応6尺度」が、生徒が抱える内的な問題を把握する上で有効であることを示すものと考えられる。

そして、それは生徒個々のプロフィールの内容を詳細に検討していくことで、より実践的な形式でのフィードバックが可能になると考える。

### 3. 個別のプロフィールに関する検討

#### 1) 検討手順

生徒個々のプロフィール内容を検討する上では、IからVIまでの数値を個別に見るだけでなく、尺度相互の関係性を含めて総合的に判断する必要がある。具体的な検討手順は、以下に示す通りである。

まずは、I.「内的自己確立」とIV.「他者・社会定位」の数値から、生徒がもつ基本的な心理傾向（自他のバランスと偏り）を推察する。

この2尺度の数値が高ければ、自他のバランスがある程度とれており、比較的安定した心理状態にあると見ることができる。逆に、この2尺度の数値が低かったり、一方に極端な偏りを見せた場合は、自他のバランスが悪いか、未成熟な段階にあり、精神的に不安定な状態にあ

ると見ることができる。

注意しなければならないのは、この2尺度の関係性が示す心理的性質は、これまでの成育過程で多くの経験を通して形成されたものであって、性格や人柄などと同様に短期間で変化するようなものではないという点である（固定化されてはおらず流動的ではある）。

したがって、単純に自他のバランスがよければ調子が良い状態にあり、悪ければ不調に陥っているというわけではない。

自他のバランスがよい生徒でも、悪条件が重なれば心理的健康を損なうことはあるし、逆にバランスが悪くても、好条件に恵まれれば安定した状態を保つことができる。

この2尺度の関係性が示すのは、一時的ではなく継続的な精神バランスであり、これは生徒がもつ基本的傾向や気質、あるいは根本的な問題の所在、潜在的なリスクなどを推しはかるものと言うことができる。

自他のバランスが悪い生徒は、エゴイスティックな言動や依存的な態度といったような、周囲との軋轢を生む行動をとることが多くなり、対人関係でトラブルを生じる可能性が高くなる。

また、たとえ現状で明確な問題が確認できない場合でも、不安定な状態にあることは変わりなく、心理面の健康を崩す潜在的なリスクは高い状態にあると考えられる。

この点を考慮した上で、次に生徒が実際に何らかの切迫した悩みやトラブルを抱えているかどうかを判断していく。

生徒が抱えるトラブルの有無については、II.「ストレス」の数値から推察する。この尺度の数値が高ければ生徒がもつ心理的ストレスは低く、逆に数値が低ければ心理的ストレスが高い状態であることを示している。単純に、ストレスが高い生徒は何らかのトラブルを抱えている可能性が高いと言えるし、ストレスが低い生徒は現状に大きな問題がないと判断できる。

ただし、生徒理解を深めるという点では、問題の有無を確認するだけでは不十分で、それが何に起因するかを把握することが、より重要な意味をもつ。原因がわからなければ適切な対処をとることはできないし、心理面の不調を解消することもできないからである。

問題の根本的な原因という点では、自他のバランスをもとに推察すべきであるが、それとは別に現在のトラブルが、具体的にどのような経緯で発生しているかを把握することも必要になる。この際に有用となるのが、Ⅲ.「家庭適応」、Ⅴ.「クラス・仲間適応」、Ⅵ.「学校・教師適応」の数値である。

この3尺度はそれぞれの場における生徒の適応状況を示しており、数値が高ければその場での他者（家族や級友、教師）との関係性が良好であり、居心地の良さや安心感を得ていることを表している。逆に低ければ、他者との関係性に不満を抱いており、拒否感や不信があることを表している。

高いストレスをもつ生徒の場合、適応に関する3尺度のいずれか（あるいは複数）の数値が特に低いようであれば、その場における人間関係に何らかのトラブルがあることが推察される。そして、そうしたトラブルが原因で、心理面の不調が生じている可能性が高いと考えられる。

なお、適応の数値が高い場合、基本的には心理的安定度が高まり、それに伴いストレスも軽減されることになると考えられるが、例外的なケースもある。

特定の対象に対してよく適応しているということは、その者からの影響をより強く受けるということでもある。「朱に交われれば赤くなる」という言葉があるように、交際する相手によって人は感化されるものである。そして、それはよい結果だけをもたらすものではない。例えば、大人しい生徒でも粗暴な生徒と交流すれば、その影響を受けることで言動が荒れるといったことが起こるように、悪い方向に作用することもある。

また、適応にはその場における他者に定位することで、自身の安定化を図るという側面があるが、定位対象が不安定な状態に陥った場合、自身もそれに引っ張られる形で揺らいでしまうということが起こる。この場合、相手に対する定位の度合いが高いほど、つまり、よく適応しているほど受ける影響は強くなってしまふ。

このように、適応の高さはプラスに作用するだけでなく、逆にトラブルの要因となるケースもあるので、数値の高低だけで良し悪しを判断するのではなく、他の尺度との兼ね合いを考慮する必要がある。

以上に見たような手順に従い、プロフィールに示され

た情報から生徒の内面について検討していく。

## 2) プロフィール内容の検討

プロフィールに示された情報と、事前に用意した各生徒に関する養護教諭のコメントとの整合性を検討した結果は次の通りである。

全25名のうち、Ⅱ.「ストレス」の数値が平均値（50）を上回っていたものは5名しかいなかった。この5名については、養護教諭のコメントにもトラブルや悩みを抱えていることを示すものはなかった。

ただし、Ⅰ.「内的自己確立」とⅣ.「他者・社会定位」の数値に示された自他のバランスについては、かなり極端な偏りを見せるケース（ⅠとⅣの数値がそれぞれ81と10、89と9、0と89）が含まれていた。

この3名に共通する特徴として、適応に関する3尺度のうちどれか一つ、あるいは複数の尺度で70～90パーセントایلといったかなり高い数値を示していた。これは、彼らが教師や級友、家族といった周囲の人々から肯定的に受け入れられることで安心感や充実感を得ており、そのことによって心理面の健康を保つことができていると見ることができる。

ただ、現状では大きな問題は出ていないとしても、精神的に不安定な傾向があり、潜在的なリスクは高いと考えられるので、注意深く見守る必要があると言える。

Ⅱ.「ストレス」の数値が平均値を下回った20名については、養護教諭のコメントにも、不登校や学業不振、教師や級友とのトラブル、家庭内の不和といった内容が多く見られた。

また、コメントにおいて自己中心的とされた生徒は、Ⅰ.「内的自己確立」が突出して高い数値を示していたり、自信がなく人目につきたくない感じとされた生徒は、逆に極端に低い数値を示していたりといったように、生徒の心理傾向に関してもコメント内容と合致するケースが多く見られた。

適応に関する3尺度については、コメントにおいて人間関係にトラブルがあるとされた尺度の数値は低い数値を示し、関係が良好とされた尺度の数値は高い数値を示していた。

ここでは、個別のプロフィール検討のサンプルとして、ストレスが高かった20名の中から特徴的な形を示した3

例を提示する。

### ①女子生徒Aのケース

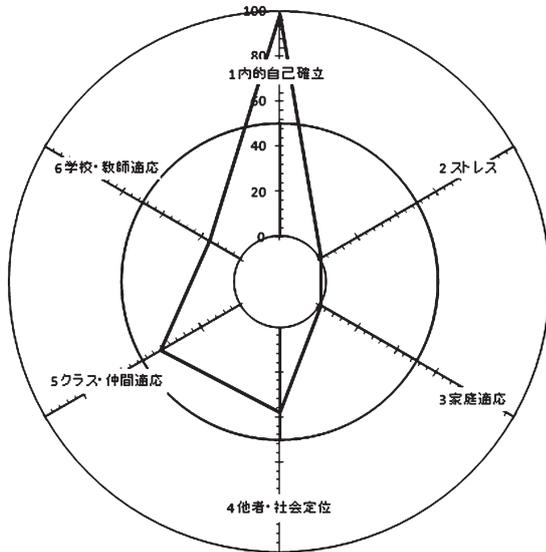


図2 女子生徒Aのプロフィール

保健室の年間利用回数は31回。I.「内的自己確立」の数値が99と極端に高く、IV.「他者・社会定位」の数値は38と低い。この2尺度の関係性に基づく心理傾向のタイプ分けでは、タイプ3（バランスの悪い不安定タイプ）に属する。

プロフィールに示される通り、I.「内的自己確立」以外の尺度値はすべて平均値を下回っているが、特に目立つ特徴として、II.「ストレス」とIII.「家庭適応」の数値がともに1と極端に低い数値を示していた。他の適応に関する尺度も、V.「クラス・仲間適応」が41、VI.「学校・教師適応」が16と低い数値であった。

これらの情報を総合的に判断すると、生徒の内面に關して次のようなことが推察される。

この生徒は、基本的な性質として、自分本位的な傾向が相当に強く、他者への配慮に欠ける面が見られる。そのために、周囲の人々との折り合いが悪く、学校生活にも順応することができていない。

現状に対して非常に高いストレスを感じているが、自他のバランスの悪さを考慮すると、それを自力で解消することは難しいと見られる（つまり、周囲からの援助や環境の変化が必要）。そして、この生徒がもつ心理的な不安定さと高いストレスの主な原因は、III.「家庭適応」

の極端な数値の低さから見て、家庭環境にある可能性が高いと推察される。

これに対して、養護教諭のコメントには、「小さい頃から怒られてしか育っていないような印象」、「母親は晩ご飯も作っていない様子」、「愛情に飢えているが、嫌なことしか言わないので独りぼっちになる」などの記述が見られた。

母親との関係に問題があり愛情に飢えている点や、他者への配慮に欠けるために、良好な関係を維持することができないといった点で、プロフィールに示された情報とコメント内容には、高い整合性が見られた。

### ②女子生徒Bのケース

保健室の年間利用回数は30回。I.「内的自己確立」の数値が36と低く、IV.「他者・社会定位」の数値は89と極端に高い。心理傾向のタイプ分けでは、タイプ3に属する。

IV.「他者・社会定位」以外の尺度値はすべて平均値を下回っている。特に目をひくのは、II.「ストレス」とIII.「家庭適応」で、それぞれ1と3という極端に低い数値を示していた。他の適応に関する尺度も、V.「クラス・仲間適応」が35、VI.「学校・教師適応」が21とかなり低い数値であった。これらの情報からは、次のようなことが推察される。

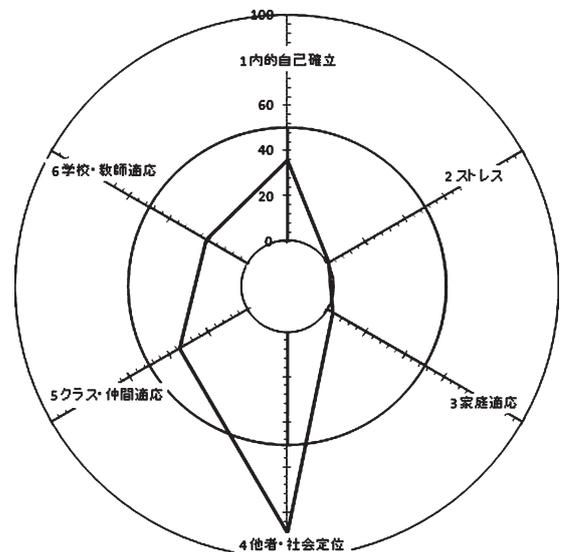


図3 女子生徒Bのプロフィール

この生徒は基本的な性質として、他者依存的な傾向が強く、周囲の環境や状況の影響を受けやすい面が見られる。本来、IV.「他者・社会定位」の数値が高い場合は、自分を抑えても他者との関係性を尊重しようとするので、比較的、適応状況が良いケースが多い。

だが、この生徒の場合は、適応に関する3尺度の数値がすべて平均値を下回っており、適応状況が良いとは言えない。

これは、III.「家庭適応」の数値が極端に低いことから見て、家庭環境に何らかの重大なトラブルを抱えていることが、主な原因ではないかと考えられる。

自他のバランスから言えば、他者に定位することで自分を安定させるタイプであるにもかかわらず、それができていない。子どもにとって家族とは特に重要な定位対象であり、最も頼りにしていることが多い。だが、それができていないことが、現状の非常に高いストレスの原因になっていると推察される。

これに対して、養護教諭のコメントには、「母子家庭」、「母親が家庭のある男性と付き合いだしたことを知り、母子関係が非常に悪い」、「不満のかたまり」、「母親を嫌いながらも愛情を求めている」といった記述が見られた。

母親との関係の悪さ、また母親からの愛情を求めながらもそれが満たされていない（基本的に他者への志向性が強い）点、それがもとで大きなストレスを抱えているといった点で、プロフィールに示された内容と高い整合性が見られた。

### ③女子生徒Cのケース

保健室の年間利用回数は45回。I.「内的自己確立」の数値が16、IV.「他者・社会定位」の数値が13と、ともに極端に低い。心理傾向のタイプ分けでは、タイプ4（自他両方が育っていない未成熟タイプ）に属する。

IからVIまでのすべての尺度で平均値を大きく下回っていた。II.「ストレス」の数値も6と極めて低く、適応に関する3尺度についても、III.「家庭適応」が30、V.「クラス・仲間適応」が6、VI.「学校・教師適応」が17といずれもかなり低いものであった。これらの情報からは、次のことが推察される。

この生徒の場合、自他どちらも低い水準のまま育っておらず、精神が未熟な段階にあると見られる。自己追求

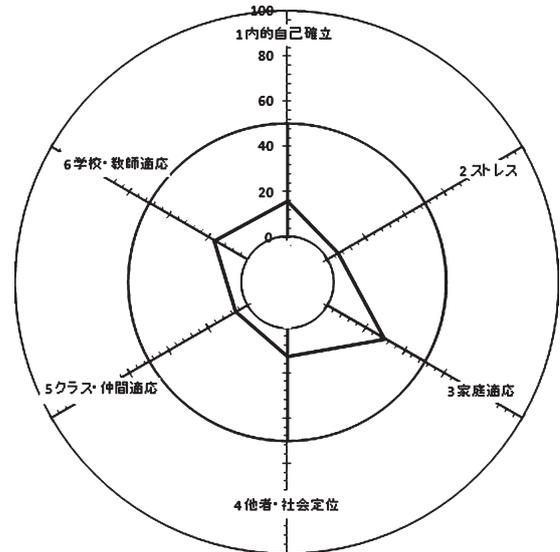


図4 女子生徒Cのプロフィール

を図ろうとする傾向が弱く、同時に他者への志向性も弱い。自分が何を目指し、何を支えとするかが曖昧で、何者に対しても十分な定位ができていない。

自分というものの核や芯といったものがないので、精神状態は非常に不安定なものとなり、わずかなことで激しく動揺したり、強い不安感を抱いたりすることが予想される。

そうした内面の不安定さは行動にも反映されることになるが、それは当然、対人関係のトラブルを起こす原因となる。

適応に関する3尺度の数値がいずれも低いのは、実際にそうしたトラブルが起きているためと見ることができるとし、常にトラブルを抱えていることが、ストレスの高さに表れていると考えられる。

養護教諭のコメントには「自分の内面のことはなかなか話すことができない」、「二枚舌で仲の良い子の悪口を陰で言う傾向がありトラブルが多い」、「精神状態の起伏が激しく、突然無視したりする」、「最も問題のある生徒」といった記述が見られた。

自分というものが確立できておらず、他者への配慮にも欠けること、それが原因で多くのトラブルを起こすこと、精神が非常に不安定な状態にあることなど、多くの点で、プロフィールから得られた情報との間に内容の一致が見られた。

この3例以外についても、ほとんどのケースでプロフィールから得られた情報と養護教諭のコメントに大きな差違は見られなかった。各尺度の数値とコメント内容が合致しないケースも数例見られたものの、全体としては高い整合性を示していた。これは、「生徒理解を深める心理・適応6尺度」が、生徒個人の性質やそれに伴う問題点の把握、また既存のトラブルの発見や原因究明に十分役立つことを示すものと考えられる。

### 3) 今後の展望

「生徒理解を深める心理・適応6尺度」は、教育現場において多くの課題や様々な問題と向き合っている教師を支援することを目指して、生徒理解の補助を目的として構成したものである。

本研究では、保健室の利用回数が多い生徒を調査対象としたが、6尺度を構成する上で基点とした「自己追求と他者志向のバランス」、「適応状況」、「ストレス」といったものについて、生徒の内面をよく反映した結果を得ることができた。これは、6尺度がもつ妥当性の高さを示すものと考えられる。

今回の研究では調査対象が1校のみであり、またサンプルも25例と数が少なかったこと、養護教諭から得た生徒に関する情報が事前に収集したコメントのみで、情報量が十分とは言えない点などが、問題として残っている。

今後の課題として、現場との協力体制をより緊密なものとし、調査対象と内容を拡大していくことで、6尺度の妥当性のさらなる検討を進めていく。

## 参 考 文 献

- 清重友輝・西本素江・福森護 (2017) 生徒理解を深める心理・適応6尺度の構成 中国学園紀要, 16, 97-106.
- 西本素江・清重友輝・中塚善次郎 (2016) 生徒理解を深める心理・適応6尺度の構成と妥当性の検討 中国四国心理学会論文集, 49, p 6.